学校点描

今年最後に『ことばのシャワーノート』をつくりました。そして、希望する生徒に配布しました。

《K中学校》

NO.18 R2. 12. 26

担当：校長

18日（金）は、K高校の卒業研究プレゼンテーションを本校ランチルームで行いました。K高校3年生のI・Yさん、K・Aさん、N・Hさんの3名がK中学校3年生に自分が研究した内容をパワーポイントを使って説明してくれました。農業の法人化を研究したIさん、歯と健康寿命を調べたKさん、ビーナッツによる町おこしを提案したNさん、三人三様の発表でした。一人一人の発表の後には、質疑の時間があります。発表を聞いた中学3年生が挙手をして積極的に質問をしています。「農業法人して貸し出す物は何がありますか？」「どうして歯のエナメル質は削れるのですか？」「ビーナッツとニラの所得額を調べていますが、なぜニラと比べたのですか？」用意された質問ではなく、その時、その場で考えた質問の多さに一緒に見ていた教育長さんも驚いていました。

同時間に調理室では、2Bの生徒が家庭科の授業で、鮭のムニエルをつくっていました。グループごとにアルミ箔で包んだ鮭をフライパンを使って蒸しています。鮭とエノキがたくさん入っているグループもあれば、コーンとチーズを加えているグループもあります。「グループごと違っていいんです」と教えてくれました。コロナ禍の中でも、工夫しながら調理実習が行われました。

償　いⅡ

“ことばのシャワーノート（Shower Note）”とは、心を動かすエネルギーとなるような『言葉』、失敗しても再び起き上がろうとする力になる『言葉』をわたしなりにこれまでの経験から考えて各ページの上部に入れたノートです。スクールサポートスタッフの大場さんがパソコンで全ページに懸命に入力してくれました。実は、以前、S市教育委員会にいた時に、わたしが思いつき、制作し、当時、市内の小学３年生から中学３年生全員に配布したのです。実はその時もらった中学生の中に、大場さんがいたのでした。当時のノートを大場さんに見せたとき「表紙で思い出しました。」と話してくれました。今回は、１回目のシャワーノートに、さらに30ページ以上追加してK中生専用の“新しいシャワーノート”をつくってみました。1ページ、1ページの言葉が、K中生一人一人の力になればうれしいです。

唐突ですが、高校生だった時か、大学生だった時か忘れましたが、ラジオから聞こえてきた歌の中で、“さだまさし”という歌手が唄っていた『償い』という歌が今でも忘れられません。ほんの一瞬でしか聞いたことがないのですが、その歌詞が強く心に残ったことを覚えています。人生の意味について、いろいろ迷い、考えていた時だったからかもしれません。

平成13年4月29日の、午前零時ごろ、東急田園都市線の車両の中で、当時10代の少年２人と当時43歳の銀行員だった男性とが、体が当たったとか当たらなかったとかということで、トラブルになりました。少年２人は、自分達の感情を抑えることができなかったのでしょうか、三軒茶屋駅のホームに降りたところで、２人がかりで、その会社員の男性を殴り倒しました。通報により、少年２人は逮捕されましたが、男性は、瀕死の重体となり、5月4日にくも膜下出血のため命を落としてしまいます。当時、銀行員の男性にはもうすぐ結婚する婚約者もいました。

逮捕された２人の少年は、傷害致死罪という罪の疑いで、東京地方裁判所にて裁判が始まりました。残念ながら、裁判の際に見せる少年２人の態度は、周囲の人をも驚かすような、傲慢な態度で、人ひとりの大切な命を奪ったという反省の態度が感じられません。言葉では「すみません」と言っても、その表面的で心のともなっていない言葉であることは、誰が聞いてもすぐに感じ取れるのです。

裁判の判決で、この裁判を担当した　山室　恵（やまむろ　めぐみ）　裁判長は、少年２人に対し求刑通り、傷害致死罪で懲役３年以上５年以下の不定期刑とする実刑判決を言い渡しました。

判決後、裁判を閉廷しようとした山室裁判長の心に、まったく反省の色を見せない、少年２人に対し、何か引っかかることがあったのでしょう。こんな言葉を発したのです。

「君達は、さだまさしの『償い』という歌を聴いたことがあるだろうか。」

そして、うつむいたままの２人に、「この歌の、せめて歌詞だけでも読めば、なぜ君らの反省の弁が、人の心を打たないかわかるだろう。」と少年達に投げかけたのです。

この裁判の出来事は、わたしにあの若き日に聞いた曲を思い出させてくれました。

令和２年の最後の登校日に、校長の話として、校内放送でこの『償い』という歌の話と曲を流しました。たぶん、今時のJ-POPの曲調とは違う古めかしい曲に聞こえたかもしれません。

歌の内容について、作者はこう語っています。

『この歌のテーマは重たいが、もとは実話だ。知人が交通事故でご主人を亡くした。加害者は遠い町に住む男性だったが、すごく真面目な人だったらしく、彼女のもとへ賠償金を毎月少しずつだが律儀に郵送してくる。事件から7年経過したある日、彼女は「ひとりで生きることが出来るから」と、その加害者に手紙を書いた。「もう、お金は送ってくれなくて良いです」と。だが翌月もその翌月も、加害者である男性は送金を欠かさなかった。これは実話だ。』

さだまさし（サンマーク出版『償い』より）

今年のコロナウイルスによって、自分の人生が大きく変わってしまった人が多くいます。

あたるところもない悔しさを背負いながら生きている人が多くいます。

“誠実に生きる”とはどんな風に生きることなのか。それは私もわかりません。

ただ、苦しみ、悩む中でも誠実に生きることを可能にするのは、“ことば”しかないと思っています。今は何気ない言葉でも、きっといつか自分を奮い立たせる“ことば”になることがあります。

だから今の中学生に、もっともっと力になる“ことば”を贈りたいのです。

きりとり

ご意見・ご感想をお願いします。

メールでご意見をいただいても構いません。Shinyatk1616n@yahoo.co.jp

※『ことばのShower Note』に興味のある方は残部があるうちはお分けできます。学校にご連絡ください。